

〔退職記念最終講義〕

孤立を恐れず，対等の協働を！

深井 純一*

はじめに―「なぜ大学の教師になったのか？」と学生に問われて

先日やぶから棒に「なぜ大学の教師になったのですか？」とゼミの学生に聞かれました。思わぬところから球が飛んできて、一瞬言葉をどう選んで説明したらいいか考えましたが、「学生運動をやっている就職から締め出されたのさ」と答えました。

(1)60年安保，学生運動再建，全院協，東大闘争……闘う青春に明け暮れた日々

私は学生時代に学生運動に，大学院では院生運動に明け暮れました。大学に入学したのが60年安保の年で，その後学生自治会を建て直すために委員長にも立候補し，名前を表に出しました。当時の東大には警視庁の公安の目が光っていました。文部官僚の牙城だった学生部とも連絡を取り合っていたようです。私を応援してくれた同級生はすでに家族持ちで，就職しなければならないから一切伏せて名前を出さないように配慮したけれど，それでも嗅ぎつけられ，彼は就職に大変苦労しました。指導教官が頼み込んで名古屋の中堅企業によく就職することが出来ました。わがゼミの第1期生で札付きのはみだし者だったF君の再就職を受け入れてくれた男です。

私のように名前を出していると，デモ行進の届け出や学外での集会届けにも行くし，誰かが捕まればその差し入れにも行かなければならない。幸い，なぜか私は捕まりませんでした。そういう活動をやっていたらブラックリストに載ってしまいます。そんなことで就職なんて全然ない。あの時に私と同じような活動をした人は全学で20名くらいいましたが，皆まともな就職はできず，大半が大学院に行きました。専門が異なるので厳密な評価は出来ませんが，その多くが個性的な志ある学者になったと思います。私の恩師が「学生運動くらいやらなかったら，まともな学者にはなれないよ」と口癖のように言われていたことがよく分かります。

(2)「割の合わないこと」をするのが若者なのだ

ところで最初の「なぜ大学の教師に？」と質問した学生が，私の説明を聞いて「なんでそんな割

*立命館大学産業社会学部教授，2006年4月1日より名誉教授

の合わない学生運動なんかしたのですか？」と私に言うものですから、それには正直言って答えに詰まり、何も答えませんでした。今から思うと次のように言えばよかったなと思います。「若者というのは世俗的な算盤に合わないことでも、夢中になってやるんだよ」。世俗的な算盤というのはその時代の支配的な考え方、通念でしょう。若者が皆それに従っていたら世の中は変わっていきません。いつの時代にも若者は世俗的な算盤を無視して生きようとしたのではないのでしょうか。

私のゼミや講義の受講生たちも、単位を取るだけならば苦勞が多すぎる。他のゼミや他の講義を取る方がずっと楽です。そういう意味では今のゼミや講義の受講生たちも私と同じです。割の合わないことに挑戦する若者の本質を備えているのだと思っています。

(3)信州の村々の農業青年との学習・調査活動にハマッて

私は大学進学に際して工学部に行って建築設計をやりたかったのです。姉菌さんみたいになっていたかも知れませんが（笑）。建築設計よりもはるかに面白い世界があると分かったのが学部の2年生の時です。私の身近な所に主に長野県の農村へ出掛けていた大学院生がいて、その人にくっついていったら私の知らない世界がありました。私も5歳の時に1年間だけは開拓農家の経験があるのですが、1年くらいでは農村を分かったことになりません。

時々行っているうちに「毎月通ってこないか」と言ってくれた3つの村があって、そこへ毎月行っていました。農学部に進んだ頃にたまたま学寮に入れたものですから、カッコよくも親に「これからは自活してやっていくから、家を出たい」と宣言したのですが、国立大学でも自活は容易でなく、アルバイトに追われていました。だから村へ自前で出かける金はありません。

しかし村の青年たちは毎月私が行くと一晩勉強会をやった後、皆で皺くちゃな100円札を出してくれて、10人もいれは1,000円。東京と信州の間を往復する鈍行の汽車賃に十分なりました。しかし彼らは怖い青年たちでした。中学や農業高校しか出ていない青年たちでしたが、彼らが村の現実と農政を見抜く鋭い眼力、少しでも時間があつたら眠い目をこすりながら必死になって本を読む集中的な読書力など、真の学力を身につけていることを目の当たりにして、早々と学歴信仰を捨てる事が出来ました。低学歴でも優れた力を持った青年は世の中にたくさんいると痛感したことは、私の人生に大きな意味を持ったと思います。学歴は関係がない。学歴で人を見ることはとんでもない間違いだということを彼らが教えてくれました。農業・農村問題の基本を教えてくれたことを含めて、私にとって彼らは本当の恩師であり、村は本当の母校だったと思っています。

私はろくに大学の授業には出ませんでした。僕の恩師がそのことをよく分かってくれて「週1回、私のゼミの日に来てくれれば、あとは村を歩き回っていてもいいが、その間誰と何を語り合い、何を発見してきたか、その土産話をしてくれ。大学は君が村を歩き回って見聞することに比べたら、たいしたことを教えられる所じゃない」と言ってくれました。お蔭様で胸を張って私は大学をさぼりました。学生運動もアルバイトも忙しかったのですが、村々で学んだことが今日まで私を支えてくれる人生の信条になりました。村の恩師とのおつきあいは今でも続いていて、私のゼミ卒業生が3人も孫弟子になって泊まり込んで働いたり、娘代わりに訪ねて行っています。

1. 大学院を終えて立命館に拾われる

私は前述のような事情で大学院に行きましたが、大学院を出ても今よりもっと就職の道は限られていて大学の教師にでもなるしかありませんでした。大学院を終えて1年間浪人しましたが、産社の「都市問題」の教員募集に応募したら、遠藤巖さんと私が最終選考に残ったと聞かされて即座に降りました。「彼の方が優秀であるし、京都市役所に勤めながら二部を卒業して、研究を続けてきた彼の経歴が認められるのは立命館くらいだから、私は他大学を探します」と伝えました。

その時の細野学部長が「他人を蹴落としても就職したいのが普通なのに、自分から譲るとは面白いヤツだ。会ってみよう」と言われ、京都に呼び出されて面接の結果、私は同志社の教授が非常勤で担当されていた「地域計画論」の専任として採用されました。《人に譲ると道が開けることもある》というのは私の人生の教訓です。この話は遠藤氏も晩年私がお話しするまでご存知ありませんでした。

2. 試行錯誤して創り上げたゼミの農村調査の方式

(1)読書は嫌い、現場で動き回るほうが好き、という学生たち。

今、ここにいるゼミ卒業生の諸君たちは本当に授業をよくさぼったと思います。ろくにゼミにも出てこなかったけれど、いい勉強をしたのではないですか？大学は学生証を手に入れて、可能ならば奨学金をもらって、好き勝手なことに没頭する所。それが学生生活だという観念が今でも私自身から抜けません。学校なんて出てくることはない。先生の話なんてありがたがって聞くことはないと……。

今日では真面目に出席する学生たちが多いのですが、いい成績をあげていい就職をしたいと考えているのでしょうか。しかし大学は彼らに何を教えてあげているのか。大学が高等教育を担っているなんて考えてはいけません。大学よりもっと優れた学びの場があると思います。

大学では大講義各々3ヶ月余りで14回の授業がありますが、私は自分の担当する各科目のうちそれぞれ1回は、卒業生や村の恩師などを招いて特別講義をしてもらっています。受講生たちは私の授業よりも一生懸命聞いていて、感想のアンケートを読んでもびっしりと書いています。教師としていつも負けたなと思いますが、大学の務めは卒業生や在野の人と在校生をつなぐ学びの時間をつくることではないかと信じて、もっと試みたいと思いますが、残念ながら私にそれをやれるのはあと1年しかありません。産社の先生もぜひ特別講義を取り入れてほしいと思います。「呼んでくれたら、いつでも大学の教壇に立って話をしますよ」と言う卒業生はたくさんいて、全員がそういう力を持っていると思います。

私は70年からゼミを持ちましたが、最初から農村調査に入りました。自分が学生時代に農村を歩き回って、勉強の面白さを痛切に感じたから、ゼミ生たちにぜひ追体験させてあげたいと思ってゼミ

ミを始めたのですが、私のゼミに集まるのは揃いも揃って読書が嫌い。村内を歩いて何か面白いものはないかと目をキラキラさせて探し回る、そういう学生たちだったと思います。

でも考えてみたら、私も同じような学生だったのですね。研究をしていると読書はせざるをえませんが、最小限度しか読みません。主要には私のめざしている仕事が行われているか否かを確認するためです。本を読むより誰も触ったことのないナマの第一次資料を発掘し、分析する方がはるかにいい。私の恩師は地主制史の研究者でしたが、常々それを強調されていました。

(2)ゼミ生たちの自主性を尊重した

私は先生にあれこれ指図されて勉強するのが嫌いで、農学部の学生だった時、正規の科目であった農村調査に関して、学校が対象地を決めて助教授と助手が引率していくのが通例だったのですが、私が申し入れて調査先を自主的に決めさせてもらいました。福島県の或る町の青年団と合同調査という形で、団員の家に分宿し、終了後には野球の試合も催しました。先生は仕方がない、やりたいようにやらせようと傍観して下さいました。

立命館に来て学生たちは自分と同じように干渉されるのは嫌だろうと思って、なるべく指図せずに学生たちが自分で決めて、好きなように動いたらいい。成功すれば学生の名誉であり、失敗すれば教師が責任を負えばいいと、できる限りそうしてきたつもりです。その方が学生諸君は伸び伸びと力を発揮してくれたと信じています。最近はその流儀通りに必ずしも行かず、1年くらい方針が決まらないこともあるのですが、「それは若者が指示待ち人間になったからだよ」という同僚の指摘には肯かずに、辛抱強く待ちつづけています。そうすればやはり自力で動き出すのです。

(3)超多忙の中での研究で心身を病む

しかし立命館での仕事は大変忙しいものでした。授業の準備とゼミの運営と教務をやっていると本当に研究時間が取れない。国公立大学に比べて私立大学でまともに教育と研究をやろうとすると、大変なことになることがよく分かりました。例えば新潟水俣病の資料収集のために寝台急行「北国」を使いましたが、夜寝ている暇がない。ブルートレインの寝台車の各車両に付いている空き車掌室を交渉して借り、その中で仕事をしていました。そのくらいしないと研究時間が取れません。たった一度だけ学部三役の学生主事を務めた77年には、会議が終わるとその場で研究資料を広げて仕事を始め、他の教員たちに嫌な顔をされましたが、そんなことはお構いなしでした。その結果、案の定心身のバランスを崩して重い病気になり、多くのゼミ生や同僚の方にご迷惑をかけました。

今日の最終講義で卒業生が何人も来た学年と、ほとんど来ていない学年があります。後者の学年は恐らく私が体調を崩してゼミの運営が十分にできなかった年の諸君でしょう。きっと彼らは恨んでいると思います。教育・研究を人並みにやろうとして体を壊したからと言って、そんなことは学生の責任ではない。学生としては私にきちんとゼミと授業をやってもらいたいという要求が当然あるし、それを守りきれなかった私はどんなに恨まれても仕方がない。今日来ていない諸君の顔が思

い浮かびます。済まなかったといっても伝わらないと思いますが。教師は楽しいだけでなく、責任の重い、辛い職業であるということを痛感します。

3. なぜ水俣病、次いで震災史研究に向かったのか

(1)農山漁村の公害・災害研究から目を離せない

なぜ私が過去には水俣病研究、最近では地方震災史研究に明け暮れるようになったか。農山漁村の公害史・震災史から目を背けていられないのは、学生運動に没頭した青春時代の延長上にあるテーマだからですが、忙しい私学の中でも研究を続けるには血が騒いで収まらないテーマを選ぶことが必要でした。寝ても覚めても風呂に入ってもトイレにいても、その問題が頭に浮かぶようなテーマを選ぼうと。他にも理由はあるのですが、水俣病はそういうテーマでした。

熊本水俣病研究を一段落させて、今は地方震災史研究に打ち込んでいます。これまでの震災の被害と復興の調査研究は関東大震災、阪神・淡路大震災に著しく偏っており、近年は阪神大震災の研究や対策立案をする人はたくさんいます。それは私の守備範囲の外側と考え、私は農山漁村で震災が起きた時のことを考え続けています。

最近の事例で最も関心を持っているのは一昨年10月の新潟県中越地震です。地震が起きた時、あの地域は交通が途絶して完全に孤立しました。今もなお道路は修理未完了で村内全域を車で動き回るのはまだ不可能です。住民を避難させるのに最後はヘリコプターが使われましたが、地震直後に外から救援部隊は入れません。中で誰が救援活動をしたのか。私は地元の中学生や高校生がどういう救援活動に参加したのか知りたいと思っています。これを調べようと思って8月に行ったのですが、あの時の山古志村の村長さんは衆議院選挙に出馬されてお会いすることが出来ませんでした。2月に改めて別の人々にお会いして聞き取り調査をする準備中です。

昨年3月の福岡県西方沖地震に関してはまだ現地へは行っていませんが、地震当時大人たちの大部分は対岸の福岡市へ勤めに出ていて、島に残っていた小中学生たちがお年寄りに肩を貸して、津波の来ない高台へ避難したと聞いています。

私はさまざまな震災・水害の際に地元の中学生や高校生が、どういう救援活動に参加したのか知りたいと思っています。公害、災害に悩まされた人、救済に没頭している人々から私は目が放せない。そのことに当分、自分の人生をかけようと思っています。

(2)第一次資料の収集の秘訣は誠実な人間関係の構築

私は決してスマートな人間じゃありません。愚直という言葉が好きですが、水俣病の調査の際も愚直にしんどい調査を続け、熊本県庁の水産課と衛生部に内部資料が保管されていることを知って、そのコピーを手に入れるのに毎回4～5日間かけて6回通いました。

その資料を管理している人とのつきあいを重ねて、彼の私に対する警戒心を一個一個解きほぐして「深井さんの研究を応援しましょう。コピーを取って下さって結構です。私が責任を持ちますか

ら」と言って下さるまでの関係にたどり着くことが出来れば成功ですが、簡単には行きません。

新潟県庁の場合は大部分の公的資料のコピーが簡単に手に入ったのですが、内容を精選して無難にまとめられていて、そんな場合にはいい資料はありません。苦勞させられたのは衛生部参事として渉外関係を担当していたE氏が3冊の大学ノートを作成しているながら「これは私の私的な記録だ」と言い張って、弁護団を始め誰にも見せようとしなかったことです。このような時には私は俄然闘志がわいてきて、コーヒー好きな彼に面会するのにコーヒー道具一式を持参して会うことに成功し、「ノートは貸さないが、質問にはノートに基づいて答えよう」と言ってくれるまでに漕ぎ着けたのですが、それでは時間が掛かり、核心部分が分からないので、なぜ彼がノートを公開しないのかという理由を探し出す調査に取り掛かりました。

「水苔問題ではないか」とヒントを与えて下さったのは当時NHK新潟にいたK記者でした。調べてみると新潟県衛生部は有機水銀垂れ流しの真犯人を特定しようと、阿賀野川流域をくまなく調査して、辛苦の末に昭和電工鹿瀬工場の排水管の管壁から水苔を採取し、それを新潟大学に送って遂に有機水銀を検出することに成功したのですが、水苔に着眼して採取したのはE氏だったのに、その功績が検出した新潟大学助教授のものにされてしまったことへの恨みだったようです。

4回目の面会でそのことを切り出すとE氏の表情が変わり、私の論文に彼の功績を明記すると約束すると彼は快く3冊のノートを貸してくれました。後日私の論文を持って癌で入院中の氏を見舞い、約束を果たした証をお見せすると実に嬉しそうで、間に合って良かったとホッとしました。

(3)協力者の安全をいかにして守るか

以上のような過程を経て入手した資料を使って論文を書く場合に、協力者の守秘義務の問題にぶつかります。その義務に違反したらその人は場合によっては解雇される。今度は私とその人の身の安全をどのようにして守るかを考えねばなりません。

私はNHKの番組に出た機会に、ディレクターに「水俣病に関する面白い資料があるから、わが家へ来ませんか」と言うのとすぐに2人でやってきて、1日中資料に目を通していました。その際に原資料の熊本県庁内の所在場所を教えて、「NHKから県知事に資料の公開を申し入れてほしい」と頼んだのです。その申し入れが実現して、幸い熊本県知事は公開に踏み切り、協力者の守秘義務違反が解除されました。私もその人がクビにならずに済んだことに、心底からホッと胸をなで下ろしました。内部資料を探すにはこういうことが付きまといます。なおNHKはこの資料をもとにして『埋れた報告』というドキュメンタリー番組を制作し、芸術祭大賞を取りました。この番組はつい先頃の「NHKアーカイブス」で再放送されましたので、ご覧になった方もおられるでしょう。

それにも増して苦勞して入手したのは昭和電工の内部資料です。学科の先輩が常務だったのでご挨拶にうかがって、水俣病問題の調査をしていると話すところ「学術研究ならばご協力しましょう」と言われたのを、総務課長が過大に受け取って資料保管倉庫の鍵を私に貸してくれたのです。私は4ヶ月間毎週横浜の倉庫へ通って膨大な資料にすべて目を通し、段ボール箱10数箱分をコピーして持ち帰りました。私がだました訳ではないのですが、その人をいかにして守れるか答えが見つかる前

に鍵の件が発覚して、総務課長は左遷されました。彼と常務がこの世を去るまではその資料は使わないことに決めて仕舞い込んできました。震災史研究が一段落したら使い始めます。

(4)資料の整理・分析に没頭した日々

集めてきた資料を整理し、分析することもしんどい作業です。72年から76年くらいまで資料の収集を続けましたが、当時の立命館には冷房がありません。夏休みに研究室で上半身裸になって汗だくで整理・分析の仕事をしていました。女子学生でも訪ねてきたら「キヤーツ」と言われそうですね。国公立大学のように助教授・助手・院生のピラミッド構造がなく、私自身で全てをやらねばならなかったことは苦しいけれど良かったと思っています。一部分は学生諸君にアルバイトで作業をしてもらいましたが、研究というのは自分で格闘して組み立てていくものです。博士論文になった『水俣病の政治経済学』の第4章の資料の分析はこうして実現することができたのです。

教育に手を抜かずに一生懸命研究して、なお学位をとる、著書を出すために同僚たちも大変な苦勞をされています。くれぐれも私と同じように病気になるまいと祈らずにはおられません。大学の教師は自分で自分を追い込んで仕事をしていかないと務まらないということです。

(5)教員の研究に対する学生一般の無関心

ところで残念なのは大多数の学生諸君が教員の研究に関心を持ってくれないことです。ゼミの学生でも私がどんな研究をしているか、今度どんな本を出したかについてほとんど関心を払ってくれません。学生が悪いのではなく、立命館にアカデミズムの伝統というか、学術研究を大事にする風土がないからでしょう。学生諸君が本を読むのはレポート執筆や試験の準備のために限られます。きちんと教育するために不可欠な教員の研究に学生諸君の関心がないのです。立命館が今後、単に学生数が多いとか入試で偏差値が上がったとかだけでなく、世間に誇る大学になるためには学術研究を大事にする雰囲気欠かせません。学生諸君がいい授業を受けたいければ、教師が十分な研究の蓄積をもって教えてほしいという気風を広げてほしいと思います。

4. 孤立を恐れず、勇気をふるって自説を述べよう

(1)少数意見でも正否は歴史が検証する

本日の主題に関わる話に入ります。学部長が言って下さいましたが、私は1人で孤立しても言うべきことは発言しようと心掛けています。私が発言した時に教授会でも委員会でも、ほとんど同僚からの意見がありません。私が言っても言いっぱなし。今の國廣学部長はまだ応答してくれますけれど、過去には応答さえせずに「はい、次の議題」ということが何度もありました。

でも私はすべてが仮説だと思っています。私だけしかそう思わない、私だけしかそう言わない少数意見で、多数は黙っているか他の意見を持っているという時でさえ、私が間違っているとは思わない。どちらが正しいかは、時間を置いてみなければ分からない。多数決は少数意見より多数意見

の方が正しいことが多いだろう、という仮定に立った方式に過ぎません。多数意見と言っても公職選挙のように無記名投票が行われるならば別として、一般的には多数意見は「無難だから権力を持った者の意向に従っておこう」という単なる迎合に過ぎないことが少なくありません。

(2)少数意見を守る援護射撃を

皆さんには多数意見に安易に迎合せず、考え抜いて自説を述べることの意義を強調したいと思いますが、せめて他に少数意見を述べる人がいた時に、その人を守ってあげてほしい。守り方はいろいろありますが、「今の発言は大事なことに触れていますよ」「考えるべき点がありますね」。もっとぼかして「そういう考えもありますね」「もう少し聞いてみたい」でもいいから、その人が発言した後、寒々とした空気がその発言者を包むのは避けてほしい。私は常々誰かが発言した後、その人を応援する意見がなさそうだなと思うと、自分が手をあげて援護射撃をしようと心がけています。

以前ドイツ語の授業科目が減らされる方向にあると知って、ある教員が文部科学省に駆け込みました。「大学での第二外国語はどう変わろうとしているのか？」と聞いたらしいのです。そのことが文科省から伝えられたのか、学内で問題になりました。立命館が文科省に気に入られる大学になろうと努めていた時だから（笑い）、なおさらでした。彼は教授会で吊るし上げを食ったので私は怒って「教員には調査する自由がある。まして自分の担当する科目が大きな変化にさらされ、減らされる恐れがある時に、学内で聞いても分からないなら文科省に聞きに行って何が悪いのだ。彼がしたことの何が間違っているのだ」と発言しました。後で彼から「あの時、発言してくれて助かった」と言われました。

誰も援護しなくて彼が「あーあ言わなければ良かったかな、損しちゃったな」と思わないで済むようにしたい。そういう場合の発言は考えに考えて、「自分の言うことは間違っていないか」と反芻しながら、勇気を出してしゃべっている訳だから、重い中身を持っている場合が少なくないのです。

(3)トナミ運輸・Kさんを支えた人々

富山県高岡市にいる3期生のF君と26期生の同市出身のT君にお願いして、トナミ運輸のKさんに関する地元紙の記事を入手することが出来たので、レジメに添付してあります。大手の運輸会社がヤミカルテルを結んで運送料金をつり上げたことに対して「それは間違っているのではないか」と内部告発したところ、それ以来30年間密室に閉じ込められて何も仕事を与えられず、それでも耐え抜いて富山地裁に提訴したところ、地裁が「報復人事である、許されない」と認定してくれました。それでも彼は認定内容が不十分だとして名古屋高裁に上訴して、最終的に去年9月和解が成立しました。『サンデー毎日』が去年3月13日号に詳しく書いています。

私がうれしかったのはKさんは孤立しなかったことです。添付の記事には出てきませんが、彼を陰ながら励ます人たちが社内におり、奥さんは学校の教員だったと記憶していますが、「私が生活費を稼ぐから、やりたいようにやりなさい」と励ましてくれたそうです。Kさんは孤立を恐れなか

った人でしょうが、励ます人々がいたから30年間頑張ることが出来たのだと思います。

(4)多数意見に漫然と迎合していると会社がつぶれる

近年、企業の不祥事が続いています。私が第11期のT君たち3名と、偶然現場に最初にかけつけた御巢鷹山の日航機ジャンボ墜落事故は尾翼隔壁の修理ミスですね。雪印食品、三菱自動車、NHK、クボタ、JR西日本、耐震設計偽造など次々と続いています。それらの大部分は事前に分かっていて「もしかしたら大事故につながるのではないかと」恐れていた人たちが社内には違いない。少数意見として口に出したものの結局つぶされた場合もあるでしょうけれど、大多数は黙って首脳部の方針に迎合していたのではないかと思います。

大学にも不祥事の種は少なからずあります。さっき挨拶された学部長は理事会などで反論したり、少数意見を述べておられると聞いていますが、私も不祥事はつくりたくない。大学がこんなに大きくなったら、いつどこでどういう不祥事が出てくるか分からない。最近はおとなしかった組合がストを構えるほどの理事会の横暴が続いています。トナミ運輸のKさんほどではないけれど、私も20年以上窓際で等持院の木立を眺める日々が続きました。3期前の学部長で現在組合の委員長をしているK氏が「深井さんの言っていた通りになってきたな」と言っていました。歴史が検証してくれているのです。孤独に徹するのも必ずしも悪いことではなく、窓際にいたお陰で職人的な教育と研究をしていくことが出来ましたし、恵まれない非正規雇用の人々と心通わせることも出来ました。

皆さんが漫然と多数意見に与していると会社がつぶれる時代が来ています。日航は全日空との差をどんどん開けられて、外資に系列化されるかも知れません。三菱自動車も系列化されて生き残るのがせいぜいだと思います。系列化されることがどんなに悲惨なことか。不祥事がなくても銀行が次々と合併して名称を変えていくではないですか。そのたびに行員たちが人数を減らされ、降格させられ、出向させられています。合併は企業が生き残るためであって、社員にとっては地獄です。自分がこの会社で頑張りたいと思って入った訳だから、会社をつぶさないためにも勇気を奮って少数意見を述べてほしいものです。企業のみならず自治体や国家機関も同様でしょう。

(5)少数組合で闘い続けるゼミ卒業生に学ぶ

私のゼミに何人か少数意見を言い続けて闘っている人たちがいます。第3期のA君は新潟の銀行にいて、入行した時第一組合と第二組合から誘われたが、前者の方が主張が明快だと選択したそうです。今や第一組合員はひと桁で圧倒的多数が第二組合員ですが、彼はその第一組合の委員長です。その組合を応援するために2度講演に出掛けたことがあり、先日新潟中越地震の調査で長岡に行った時に、A君と私を知る組合OB2人が飲み屋へ連れて行ってくれました。

第3期には他にも大阪教職員組合で青年部長を務めたT君、奥丹後教組の書記長を引き受けたT君がいて、2人ともその結果ずっとヒラの教員としてやっています。校長や教頭になって民主的な学校運営に尽力することも大切ですが、生徒・児童の担任から離れないで現場のベテラン教師の道

を貫くのもいいじゃないかと思っています。

もう少し後の学年に国税専門官になったM君がいます。彼は〈全国税〉という歴史のある組合に当初から加入していますが、完全に当局から睨まれている少数第一組合です。ある時、税務署長出身の税理士と話す機会があって「私のゼミの卒業生にも国税専門官がいますが、彼は〈全国税〉ですよ」と彼のことを言うと、びっくりして「そんなのがいるのかい」「そうですよ。おかしいですか」「いやぁ……しかし大変な度胸の教え子ですね」。少数組合であることに胸を張り、少数意見であることを承知で発言しつつ職場で仕事をしているのだと思います。ここで紹介した4名はみな共働きですね。M君の夫人はゼミの同期生です。みな大きな支えになっているのでしょう。

私は33年前、立命館の組合の最高揚期に書記長代行を務めました。20年ほど前に組合を脱退しました。極端な労使協調路線に傾斜していくのを支持できなかったからです。今では清掃や駐輪駐車場のガードマンのみならず、事務室の中も図書館の中も正規の職員は3割いるかいないかで、多数が契約職員、派遣職員、アルバイトで占められています。年々そういう方向になっていくのを組合は目をつむって容認しましたが、さっき紹介したような諸君が少数組合活動が続けている生き方から学ばなければと思って、この1月1日付で教職員組合に復帰しました（笑）。

残る3カ月間ですが、中高年者の人たちのために定年延長を主張したいと思っています。採用年齢の遅い教員の定年は事実上は昨年度まで70歳だったのを65歳に短縮され、それで私も追い出されることになりました。立命館大学の偉いさんと真っ向からやりあうことを楽しみに組合に戻りました。理事長、総長もとても嫌な顔をしているでしょうね。負ける喧嘩はしてはだめです。勝つためにあらゆる知恵を絞り、悪知恵も駆使する必要があります。でも組合の方も私を扱いかねて警戒しているフシが感じられ、活躍の場は訪れないかも知れません。

5. さまざまな分野で対等の付き合いを

(1) どの職場にも下積みの人々がいる

私は立命館で36年過ごして、たくさんの友だちができました。私にとって一番うれしいのは、清掃やガードマンなど下請けの現業部門で働いている人たちと友だちになれたことです。今日も駐輪場でガードマンとして働いている6人が、ここへ来てくれて私の話を聞いて下さっています。そういう人たちと友だちになって、彼らへの感謝を忘れず、対等のつきあいをしようと努力している訳です。なかなか対等にならないですけれど。彼ら曰く「大学の先生にこちらから挨拶をしても、だいたい挨拶が返ってこないけれど、深井さんだけは自分から挨拶してくれる。それがうれしい」と言ってくれました。挨拶するだけでは役に立たないし、大学が下請け企業と結んでいる契約に対して、組合が労働条件に介入する方策を考えたい。連合でさえパート労働者の組合加入を働きかける時代が来ています。難題ですが、私がいる間に問題提起だけはしておこうと思っています。

さまざまな分野に下積みの恵まれない人たちがおり、この人たちとの友情ある関係をつくることはあらゆる場合に欠かせません。

(2)資料保管者・証言者との協働にいかに関与するか

私の調査活動においても第一次資料を手に入れる秘訣は、先述の通り資料を管理している人と友だちになることでした。そのためには「自分の研究を手伝ってくれ」ではだめで、その研究をすることがその人たちにとってもプラスになるのだと分かってもらわなければならない。水俣病で大量の資料が熊本県から入手できたのは以下のような事情があったからだと思っています。水俣病が深刻化しつつある時、「何とか止めたい、防ぎたい」と思った人たちの努力が握りつぶされ、彼らはそのことが悔しくて、全部資料を残した。握りつぶされた証拠は全部残っている。そのことが分かったから「私はあなた方のやろうとしたことを含めて事実経過を明らかにしたい」と言いました。

それで彼らの態度が変わりました。「協力しよう」と。今ではその人たちは「自分は水俣病を防ぐことはできなかったけれど、精一杯のことをした。そのことを深井さんが書いてくれている。深井さんが使った資料にそのことが載っている。だから公務員としての40年近い人生の中で最大の汚点であった水俣病だけれど、守ろうと全力投球した自分たちの名誉も記録された」と言ってくれました。どんな資料にもそういう当事者たちの情念、恨みがある。それを見つめることが活路を開きます。

(3)北但馬震災の救援中学生たちも同様

もう1つ添付した新聞記事に記されていますが、現・豊岡高校、昔の豊岡中学の生徒たちが、地震でつぶれた家の下から人を救い出すことからポンプを使っての消火作業など、さまざまな救援活動をしました。鉄道も道路全部遮断され不通になって救援部隊が来るのが丸1日遅れた。1日遅れるのは決定的なのですね。特に火事が出た場合、つぶれた家の下にいる訳ですから助からない。火事を消すことが出来ても下敷きになっていたら、助け出しても体内に溜まっていた毒素が血流とともに回って死んでしまう。彼らが果たした役割は大きいわけですが、彼らは幸い604名分の作文を残していました。これを全部今の豊岡高校生が読める文章に直して、ほぼ出来上がってきています。今春2冊の本になる予定です。これも彼らがあの時、我を忘れて救援活動に取り組んだ記録です。12～17歳の少年ですよ。それを公表すると伝えたところ、彼らが本気で私に協力するようになりました。繰り返し手紙を送ってくれるし、私が訪ねて行くと快く会ってくれ、座談会に集まってくれます。水俣病の時と同じですが、そういうことを通じて彼らとの共同研究になりました。「自分が研究するから協力してくれ」では絶対に第一次資料は出てきません。

(4)ゼミ卒業生たちは私の宝物

今日、お集まりのゼミの卒業生たちとも対等のお付き合いをめざしているつもりです。「大学の教師は卒業したら学生との関係は終わる。いちいち付き合っていたら切りがない」と言う同僚もいて、それが一般的のようですけれど、私にとっては在学中を含む511名のゼミ卒業生は貴重な宝物です。中には私を「嫌いだ」と公言する卒業生もいるけれど、それでも宝物です。全員と付き合い、皆から今まで以上にいろいろと教えてもらいたいのです。そして人間としての対等の付き合いをも

っと深めたいと思います。

私は卒業生だけでなく、信州でも農民の人たち、大工、水道工事の人、お碗とか、お盆を削る職人さんなど、学者でない人たちとのつきあいを大事にしています。もっと広げていきたい。そういう人たちと付き合おうと教えてもらうことばかりです。

皆さんにも自分と違った会社、自分と異なる業界、サラリーマンやOLだけではなくさまざまな職業の人と友だちになることをお勧めします。あなた方が教わることは少なくないだろうし、あなた方が彼らに教えてあげることもあるだろうと思います。会社人間という言葉はそういう関係を断ち切って、人生を一企業内に閉じこめてしまうことだと思います。会社人間ではなく、広いつきあいをもって、さまざまなことを吸収しながら人間として一回りも二回りも成長して行ってほしいと思います。普通の秀才ではない、うちのゼミの学生諸君だったらもうやっているんじゃないかと思いますが、そうやって身についたことを私がさらに吸収できることを期待しています。ご静聴ありがとうございました。

〔資料〕

深井 純一教授 略歴と業績

1. 略 歴

- 1941年3月 大阪府豊中市に生まれる
- 1959年3月 神奈川県立横浜緑ヶ丘高校卒業
- 1960年4月 東京大学教養学部理科二類入学
- 1964年3月 同 農学部農業経済学科卒業
- 1966年3月 同 大学院農学系研究科農業経済学専門課程修士課程修了
- 1969年3月 同 大学院農学系研究科農業経済学専門課程博士（後期）課程単位取得満期退学
- 1970年4月 立命館大学産業社会学部助教授
- 1982年10月～1983年9月 カナダ・モントリオールへ留学し，主に原住民の水俣病問題を調査する
- 1983年4月 立命館大学産業社会学部教授
- 1999年5月 『水俣病の政治経済学』に対して東京大学より博士号（農学）授与
- 2002年4月～同年9月 西欧・東欧17ヶ国の田園観光地と農家民宿の実態調査を国外留学により行う。
- 2006年3月 立命館大学を定年退職
- 2006年4月 立命館大学名誉教授

2. 主な研究業績

著 書

1. 共編著『地域自治の政治経済論—新しい時代の政策論を考える—』（遠藤晃・坂野光俊との共編著，自治体研究社，1977年10月，個人では第Ⅱ章4，5，6節，第Ⅳ章3，4，7節，第Ⅴ章第5節を執筆した。）
2. 共編著『自治体問題講座第5巻 国土・都市・農村と地域開発』（儀我壮一郎・三村浩との共編著，自治体研究社，1979年7月，個人では第1章「現代日本の地域問題と地域開発」を執筆した。）
3. 共編著『地域調査法』（古島敏雄との共編著，東京大学出版会，1985年7月，個人では第Ⅰ部第3章，同第5章，第Ⅱ部第6章を執筆した。）
4. 単編著『はみ出し教師と学生が燃えて—地域調査ゼミ15年の歩み—』（文理閣，1985年10月）

5. 単著『水俣病の政治経済学—産業史的背景と行政責任—』（勁草書房，1999年9月）
6. 単編著『救援活動最前線を担った若者たち—1925年北但馬震災における生徒・学生たちの活動の研究』（深井研究室における自家出版，2004年3月）
7. 単編著『1925年北但馬震災 救援・消火に奔走した若者たち—1925年北但馬震災における生徒・学生たちの活動の研究』（同時代社，2006年3月）

学術論文

1. 単著「地価問題の基礎構造」（佐藤武夫編『講座・現代日本の都市問題3—現代の土地・住宅問題』汐文社，1971年6月）
2. 単著「鹿島開発—旧全総の到達点」（『経済評論』日本評論社，1971年6月）
3. 共著・執筆分担「明るみに出た水俣病の新事実」（舟場正富・堀口健治との共著『エコノミスト』1972年9月12日）
4. 共著・執筆分担「住民主体の地域開発は可能か」（遠藤晃・坂野光俊との共著，『エコノミスト』1972年11月5日臨時増刊）
5. 単著「地域経済」（林・柴田・高橋・宮本編『現代財政学体系3 現代地方財政と地方自治』有斐閣，1973年8月）
6. 単著「地域開発政策と農漁村」（近藤康男編『日本農業年報第23集 土地政策と農業問題』御茶ノ水書房，1974年11月）
7. 単著「水資源問題と水資源開発政策」（藤永太郎編『琵琶湖の開発と汚染』時事通信社，1975年8月）
8. 単著「由良川流域をめぐる交通の発展」（『京都の自治』第16・17合併号，京都自治問題研究所，1976年2月）
9. 単著「地域開発批判論と民主的地域開発論」（『地域と自治体』第3集，自治体研究社，1976年2月）
10. 単著「水資源問題とは何か」「水資源開発政策の基本課題と社会資本」「水資源開発政策の主体と住民・共同体・自治体」（『自治問題研究』第2号，京都自治問題研究所，1977年3月）
11. 単著「農業危機と地域開発」（古在由重編『知識人と現代』青木書店，1977年2月）
12. 単著「水俣病問題の行政責任」「水俣病年表」（宮本憲一編『公害都市の再生・水俣』筑摩書房，1977年12月）
13. 単著「農村総合計画の課題と圏域—秋田県水稲探索地帯の実態調査にもとづいて—」（『立命館産業社会論集』第21号，1979年2月）
14. 共編著『連載・80年代の農村自治をめざして』（『住民と自治』自治体研究社，1980年4月～1981年12月）
15. 共著・執筆分担「土地・水資源利用をめぐる総合調整計画—近江八幡水郷地域の土地改

- 良・河川改修をめぐる実態調査をふまえて一』（『立命館産業社会論集』第27号，1981年3月）
16. 単著「農村社会資本の現状と課題」（宮本憲一・山田明編『公共事業と現代資本主義』垣内出版，1982年6月）
 17. 単著「水俣病をめぐる国の責任」（『公害研究』第11巻4号，岩波書店，1982年3月）
 18. 単著「チッソと地域社会」（『第4回日本環境会議報告集・水俣 現状と展望』東研出版，1984年1月）
 19. 単著「熊本・新潟水俣病問題の比較研究序説」（『立命館産業社会論集』第20巻4号，1985年3月）
本論文と前出『地域調査法』第Ⅱ部第6章「自治体内部資料の収集法」は清水・宮本・淡路編『水俣病全史—第2巻 責任編』（日本評論社，1999年3月）に再収。
 20. 単著「新潟水俣病行政の研究—熊本水俣病との比較—」（『公害研究』第15巻1号，岩波書店，1982年3月）
 21. 単著「日窒・新日窒・チッソと水俣・延岡・鏡工場の歴史」（『立命館産業社会論集』第22巻3号，1986年12月）
 22. 単著「独占資本主義の地域編成（1）」（『立命館産業社会論集』第25巻3号，1989年12月）
 23. 単著「田中長野県政の脱ダム論を検討する」（立命館大学現代社会研究会編『21世紀の日本を見つめる』晃洋書房，2004年10月）

調査報告書

1. 単編著『第一次“阿智村”調査報告書』（深井研究室，1994年3月）
2. 単編著『阿智村農業の発展を願って 第2次阿智村調査報告書』（深井研究室，1995年3月）
3. 単編著『阿智村ふぉーえばー～更なる発展を願って～第3次阿智村調査報告書』（深井研究室，1996年3月）
4. 単編著『阪神・淡路大震災 淡路島北淡町・一宮町 震災調査報告書』（立命館大学阪神・淡路大震災復興研究プロジェクト室，1997年3月）
5. 単編著『青少年の意識と農村地域社会のこれから—第4次阿智村調査報告書』（深井研究室，1997年3月）
6. 共編著『小さな村の大きな実験—社会環境アセスメント最終報告書—』（長野県下伊那郡阿智村社会環境アセスメント委員会，1998年5月）
7. 単編著『小さな村の大きな挑戦—長野県阿智村廃棄物処分場建設計画に関する住民意識調査第一次報告書—』（阿智村，1998年5月）
8. 単編著『続・小さな村の大きな挑戦 8ヶ月後の意識変化を追って—長野県阿智村廃棄物処分場建設計画に関わる第二次住民意識調査報告書—』（阿智村，1998年10月）

9. 単編著『廃棄物処分場建設計画をめぐる村民101人の直言・提言 モデル的住民参加をめざして—長野県阿智村廃棄物処分場建設計画に関わる第三次住民意識調査報告書』（阿智村, 1999年2月）
10. 単編著『民意・私はこう考える—長野県阿智村廃棄物処分場計画に関わる第4次住民意識調査報告書』（阿智村, 1999年11月）
11. 単編著『兵庫県津名郡一宮町若者意識調査報告書』（深井研究室, 1999年12月）
12. 単編著『京の道しるべ：環境にやさしい宿泊施設の実現に向けて』（深井研究室, 2000年1月）
13. 単編著『京の岐路—環境にやさしい宿泊施設をめざして』（深井研究室, 2000年12月）
14. 単編著『新しい村の形に向かって～村民は提言する～』（立命館大学社会学研究科大学院生調査報告, 深井研究室, 2000年12月）
15. 単編著『阿智づくり～阿智村方式から見る新しい住民自治の可能性～—総括：小さな村の大きな挑戦—長野県阿智村の廃棄物処分場建設計画に対する取り組み（阿智村方式）に関する調査報告書』（深井研究室, 2000年12月）
16. 単編著『山村留学について～現状と問題点～』（深井研究室, 2004年3月）
17. 単編著『観光から感交へ～自然を感じて人と交わる修学旅行を目指して～』（深井研究室, 2005年3月）
18. 単編著『地域における食育の取り組みと未来』（深井研究室, 2006年1月）

以上